

その日、男は緊張しながらファルサス城を訪れていた。彼は大陸東部の小国の商人で、新たに発明された農具の売り込みに来たのだ。

最初に話を持ちこんだ領主の評判は上々で、そこから城にも紹介された。城を訪ねて誰が話を聞いてくれるのかと思ったら、相手は若き国王で、男は冷や汗をかきながら必死に農具の説明をした。

その途中、王が臣下に呼ばれて「ちょっと外す。待っててくれ」と言われての今だ。

城の小さな広間で一人きりになった男は、額の汗を拭ってしまうと、天井近くまである窓の棧を見る。先ほどから気になっていたのだが、そこには小さな黒猫が丸くなって眠っているのだ。部屋に入った時から気になっていたが、さすがに王の手前、「本物かな」とまじまじ見ることもできずにいた。

というわけで一人になった男は、窓のすぐ傍まで行くと、猫を見上げる。

窓の装飾の一部かとも思ったが、猫はやはり生きていた。小さなふわふわの体が、呼吸でふくらんだりしぼんだりしている。

男は、手を伸ばしても届かない場所に寝ている猫にそっと声をかけてみた。

「……猫ちゃん」

猫は起きない。戸口を振り返ったが、王はまだ戻ってこないようだ。男はもう一度だけ、声をかけてみる。

「ネコちゃん」

ぴくり、と子猫が動く。黒い猫はゆっくり顔を上げると、黒曜石のような瞳でじっと彼を見下ろしてきた。子猫の視線が得られたことに、男はぱっと笑顔になる。

「ネコちゃん〜かわいいね、ネコちゃんネコちゃん〜かわいいかわいい、ふつわふわだねええ、カワイイネコちゃん」

両手を伸ばして思わずそう言うと、猫はドン引いた顔になった、気がする。必死で手を振ったものの降りてくる気がないらしい猫に、男は周囲を見回した。近くにあるのは、大きな鉄の花瓶が置かれた飾り棚と、揃いの椅子だ。

男は少し迷ったが、どうしても子猫を抱っこしたい気持ちに抗えず、近くの椅子を棧の下に引っ張ってくる。靴を脱いでその上に上がった。猫は、黒い瞳をまん丸にして彼を見る。

「ネコちゃんちょっとだけ触らせて、ちょっとだけ……」

「——何やってるんだ」

扉からかけられた王の声。

その声が、先ほどとはまったく異なる冷やかかなものであったことが、敗因だったのかも知れない。背伸びしていた男はぎよっとした拍子に体勢を崩し……椅子の上から転げ落ちた。つ

いでに近くにあった花瓶に激突し、倒れた花瓶から水の飛沫が上がる。高く上がった飛沫は棧の上にいた猫にも届いて、悲鳴が上がった。

ぱっと毛を逆立てて棧の上で扇形になった猫に、戻って来たオスカーは呆れ声になる。

「だからそんなところで昼寝をするなど言っただ、ティナーシヤ……」

王の苦言はけれど、狂乱して飛び跳ねている子猫と、床の上でもんどりうっている男には聞こえていない。ちょっと離席した際にどうしてここまで意味の分からないことになるのか、オスカーは頭を抱えなくなった。

農具の売り込みに来た男は、ひたすら頭を下げて帰っていった。行き過ぎた猫構いとはかく、その品は確かなものだったので、オスカーは各領地への紹介状を書く。書いた上で、長椅子で膝を抱えている王妃に釘を刺した。

「で、ちょっとは身に染みたか？ いつまでも昼寝をしようとするからそうなるんだ。寝るならちゃんと寝室で寝ろ」

「寝室で寝ると、休憩時間に貴方が起こすんですもん……」

「いつまでも寝るな、と言ってる」

恨みがましい目でティナーシヤは夫を見ると、分が悪いと悟ったのか「ごめんさい」と零す。そのしよんぼりした姿は猫によく似ていて、オスカーは小さく噴き出したのだった。